

当施設（CVIT 認定）における経皮的心房中隔欠損閉鎖術の現状

¹東邦大学医療センター大森病院、²東邦大学医療センター大橋病院、³東邦大学医療センター大森病院

田中 雅博¹、山下 稔晴¹、峯川 幹夫¹、元木 康裕¹、原 英彦²、中山 智孝³

【背景】心房中隔欠損症（ASD）に対する Amplatzer septal occluder（ASO）を用いた経皮的閉鎖術が本邦では2005年から実施されている。CVIT 承認が得られた当施設も2010年6月から心カテ室にて経皮的心房中隔欠損閉鎖術が開始された。【目的】当施設では小児循環器医師と循環器内科医（CVIT 認定医師）が連携し手技が行われている体制であり、当施設における経皮的心房中隔欠損閉鎖術の臨床成績について検討することを目的とした。【対象】2010年6月から2012年6月までに施行した38例。男性13例、女性25例、平均年齢（中央値）57才（13～77歳）を対象とした。【方法】全例に対し術前の経食道エコー（TEE）施行している。治療手順として全身麻酔下にて治療前のTEE・圧測定・酸素飽和測定し、シャント率・ Q_p/Q_s を算出。その後、サイジングバルーンを用いTEEで欠損孔を測定。オクルーダー留置・wiggle操作を経てオクルーダーをリリースし、TEEにて最終確認を行った。【結果】術直前のL-Rシャント率は平均53.6%、 Q_p/Q_s は平均2.4を示し、用いたデバイスサイズは平均21.9mmであった。手技時間は平均88.1分、入院日数は平均4.4日であった。デバイスのサイズ変更34例中3例に認められ、1例に徐脈を認め体外式ペースメーカー挿入を余儀なくされるも、全例に手技成功が得られた。【まとめ】適切な術前評価と患者選択を行うことにより小児から高齢者までのASDに対する経皮的閉鎖術を安全に行うことが可能であった。